

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K16576

研究課題名(和文) 戦後アメリカにおける保守派の社会運動とカントリー音楽の相関

研究課題名(英文) The Relationship between Country Music and Post-WWII Conservative Social Movements in the United States

研究代表者

館 美貴子 (Tachi, Mikiko)

千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：60376580

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、米国においてカントリー音楽が社会的保守派を代弁する政治的な音楽となるまでの歴史的経緯を明らかにするものである。アメリカ南東部の民謡や伝統音楽を基盤とし、音楽的なルーツを共有するフォークソングが労働運動や公民権運動等への利用で左派の音楽として認識されるに至ったのとは対照的に、カントリー音楽は保守派の音楽と認識されているが、カントリー音楽家が明示的に体制擁護の歌を作り、大統領候補者などによる利用が顕著になった1960年代から1970年代に着目して、その要因と実態の解明を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究は学際的な視野からアメリカ文化を論じるものであり、特にこれまで十分な学術的な関心が払われてこなかった保守派の音楽と政治との関連性に焦点を当てたこと、カントリー音楽を1960年代以降の保守化という変容の相において捉え歴史的に位置づけていること、音楽を歴史を彩る付随物あるいは社会を映す鏡として二次的に扱うのではなく、積極的に文化形成を担う様相を示したこと、トランスナショナルな視点を取り入れ国際的な学術貢献をしていることを特徴としている。さらに、本研究の扱ったアメリカ社会の変容は現在に直接影響しており、その様相を解明したことは現在のアメリカ社会の歴史的理解につながる実利的な意義がある。

研究成果の概要(英文)：This research examined the relationship between country music and conservative social movements in the United States. Through analyses of archival documents and aural and visual materials, with a particular emphasis on the 1960s and the 1970s, it revealed the historical process by which country music has come to be associated with social conservatism. It also incorporated a transnational perspective by conducting comparative analyses of the ways in which the political and social meaning of country music changed as it crossed borders.

研究分野：地域研究

キーワード：アメリカ文化 社会運動 音楽

1. 研究開始当初の背景

本研究に着手する前に行っていった研究は、戦後アメリカの社会運動および冷戦期の文化外交における音楽の役割を、特にフォークソングに焦点をあてて研究するものであった。冷戦下の順応主義と物質主義に不満を持ちカウンターカルチャーを担った若者は、フォークソングをポピュラー音楽が象徴する商業主義の対極にある音楽とみなし、アメリカ主流文化に対抗する手段として愛好した。また、フォークシンガーやフォークソング愛好家たちがフォークソングを社会正義を表現する手段とみなし、人種統合を訴える歌や反戦歌を多く作り受容したことにより、フォークソングは1960年代の社会運動と強く結びつけられ、左派の政治的な音楽とみなされるようになった。これまでの研究では殊に、1930～1940年代の労働運動におけるオールド・レフトによるフォークソング利用と戦後のフォーク・リヴァイヴァルとを比較し、労働者の組織化という明確なアジェンダを持ち政治的な有効性により音楽を評価していたオールド・レフトのフォークソング運動とは対照的に、戦後のフォーク・リヴァイヴァルでは「政治的」であることの定義が広がり、歌手が個人的な視点から社会を描き共感を促すことが重視されるようになり、戦前の活動家と戦後のフォークシンガーとの間で軋轢が生じたことなどを機関誌や同人誌を読み解くことで明らかにした。また、文化外交に関しては、ワシントンの議会図書館や国立公文書記録管理局所蔵の資料を収集・分析することにより、文化外交に携わった米国国務省の職員や文化大使として海外で活動した音楽家たちの活動の詳細と評価を明らかにするとともに、国務省の報告書や音楽家の手紙、新聞報道の分析を通して、公的な文化外交に携わったアメリカ人フォークシンガーたちが、同時代のフォーク・リヴァイヴァルにおいてトピカルソングなどを通して社会運動に関わった音楽家とは対照的に、フォークソングの流動的な定義を利用して脱政治化を行った様相と意義を明らかにした。さらに、受け手である外国での受容についての分析が必要とされることから、1960年代に訪日したアメリカ人フォークシンガーの受容に関するケーススタディを行い、音楽家の発信した政治的なメッセージが観客によって選択的に受容される様相などを明らかにした。

20世紀アメリカにおける音楽と社会運動に関する研究は、ロビー・リーバーマンやリチャード・ロイスによる1930～1940年代の左翼知識人や労働運動活動家によるフォークソング運動に関する研究、「歌う運動」と呼ばれた公民権運動における黒人教会音楽を基盤とするプロテスト・ソングであるフリーダム・ソングに関するブラッドフォード・マーティンやケラン・サンガーによる研究、サージ・デニソフやディーナ・ワインスタインによるプロテスト・ロックの効用に関する研究などリベラル派や反体制派などの左派の活動に焦点を当てるものが多く、右派の政治と音楽の関連については十分な学術的関心が払われてこなかった。カントリー音楽の網羅的な歴史を記した歴史学者ビル・マローンは、カントリー歌手が1960年代に体制擁護的な立場の歌を作るようになったことを新しい動きとして指摘しているが、それを聴衆の保守性を表すものと理解し、カントリー音楽が1960年代の社会の混乱のなか音楽産業の中で尊厳を保つためであり、カントリー歌手自身は「非政治的」であったと主張するなど、カントリー音楽の右傾化の意義を明らかにしていない。また、アメリカのポピュラー音楽通史を記した音楽学者ラリー・スターとクリストファー・ウォーターマンも、1970年代にカントリー音楽がメインストリーム化し、全米の中産階級の観客に受容されるようになったことを、「国全体の保守的なムード」に起因するとしており、カントリー音楽が本質的に保守的であると想定している。本研究はカントリー音楽の保守性を当然視せず、1960～70年代を重要な転換期と考え、その実態と歴史的要因を解明するための研究を行った。

2. 研究の目的

本研究は、1960年代以降カントリー音楽が社会的保守派を代弁する政治的な音楽と認識されるようになるまでの歴史的経緯を明らかにすることを目的とした。アメリカ南東部の民謡や伝統音楽を基盤とし、1920年代にヒルビリー・ミュージックとして商業化されたカントリー音楽は、ルーツを共有するフォークソングが労働運動や公民権運動等への利用で左派の音楽として認識されるに至ったのとは対照的に、保守派の音楽であると広く認識されている。本研究では、上記のようにカントリー音楽家が明示的に体制擁護の歌を作り、保守的な連想が明らかになったのが1960年代から1970年代にかけてであることに着目して、そこに至るまでの歴史を解明するとともに、カントリー音楽と保守派との結びつきの様態を明らかにすることを目指した。戦後のアメリカにおける政治家や活動家によるカントリー音楽利用の歴史を紐解き、その発展と変容を明らかにすると同時に、カントリー音楽家が作品や言動を通してどのように政治的なつながりを持ち保守派の社会運動に寄与したのかを明らかにすることを目的とした。また、音楽に与えられた政治的な意味と役割が変容する様相をトランスナショナルな視点からも解明することを目指した。

3. 研究の方法

米国議会図書館における文献・資料調査、ブラウン大学、南カリフォルニア大学でのアーカイブ調査を行い、雑誌新聞記事、音楽家や政治家の伝記や回顧録、それらの批評、選挙活動に

関する資料や書簡などの収集と解析を行ったほか、カントリー・ミュージック殿堂博物館に保管されていた主要なカントリー音楽家の未刊行のインタビュー資料を取り寄せ、分析を行った。また、保守派の社会運動に関連した主要な音楽家の作品について、同時期の政治家の言説とも比較しながら分析した。カントリー音楽の刊行物 *Country Song Roundup* や *CMC Close-up* については1960年代から1970年代における主要な議論とその変遷を辿った。さらに、国際的な比較及びカントリー音楽の国境を超えた受容に関する研究を進めるために、日本においてアメリカの主要なカントリー音楽家の活動について報じた新聞雑誌記事や音楽雑誌の記事、日本人カントリー音楽家の作品、手記、評論家による著書や記事などを収集し分析を行った。

4. 研究成果

アメリカにおけるカントリー音楽が保守政治との結びつきを強めた歴史的経緯について、第二次世界大戦前後の南部における選挙戦での政治家と音楽家との協力関係や、その後の全米規模での選挙戦におけるカントリー音楽と政治思想の呼応、音楽協会から政治家への歩み寄り、聴衆が政治的なグループとして認識される様相などを、当時の報道やアーカイブ資料等を分析することにより明らかにした。公民権運動時の南部における選挙戦で人種隔離を掲げた候補者がテーマソングや政治集会の客寄せとしてカントリー音楽を利用したことが、同音楽と保守的な政治思想との結びつきを強める萌芽となったことが示された。例えば1958年のアラバマ州知事選の民主党予備選挙では、すべての候補者が人種隔離を公約するなか、政治集会での候補者による演説に先だってカントリー音楽が演奏されたり、カントリー音楽家が候補者を聴衆に紹介するなど、カントリー音楽を利用して有権者集めをしたことなどが当時の現地の新聞などで報じられている。また、ルイジアナ州知事ジミー・デイヴィスは自身がカントリー音楽家であり、彼が作ったとされる有名曲を選挙テーマソングとして利用したが、特に1959-1960年の選挙戦では公民権運動が高まるなか人種統合に反対する白人有権者の支持を得るため「州の権限」を主張し徹底した人種隔離をかけた、保守派の南部白人の価値観とカントリー音楽とを政治的な場面において強く結びつける役割を果たした。さらに、人種隔離主義者として広く知られたアラバマ州知事ジョージ・ウォレスは州知事戦およびその後のたび重なる大統領選でカントリー音楽を活用したが、それにより人種を基盤とする反動的な政治と同音楽との関連が全国的に印象づけられた。1968年の当選が保守派の社会運動の勝利の重要な過程とされているニクソン大統領は、ウォレス知事の戦略を踏襲したが、選挙戦中だけではなく大統領就任後もカントリー音楽をアメリカを代弁する音楽として重視し、彼が「サイレント・マジョリティー」と呼んで味方につけた人々を称賛する音楽として好んだ。カントリー音楽は単に選挙戦を彩るだけではなく、同時代の保守派の社会運動において政治的争点とされた文化的価値観を作品をとおして表現し、保守派の政治家にとって自らの思想を代弁する有効なメディアとなった。

本研究では、カントリー音楽の聴衆が同時に政治的集団として認識された様相を明らかにした。1970年のカリフォルニア州知事選では、現職のレーガン知事に対抗した民主党の候補者ジェス・アンルーが南カリフォルニアのカントリー音楽のラジオ局の聴衆である、アメリカ南部にルーツのある白人労働者階級層をターゲットとして、経済政策を打ち出して有権者に訴えようとした。しかしこれらの有権者は経済的に困窮しながらもなお、経済政策よりも文化的な争点を重視し、反戦活動家やヒッピーを非難する体制擁護的なカントリー曲の内容とも合意する立場を強く持っていたことが明らかになった。カントリー音楽の聴衆が政治的な集団として候補者に認識されたと同時に、彼らが当時の保守派の運動に合致するような政治意識をもっていたケースが明らかにされた。

また、国際的な比較の観点からカントリー音楽の日本における受容に関する研究も行い、特に戦後の日本におけるカントリー音楽の担い手となった音楽家や受容者の手記や刊行物、記事の分析を通して、音楽に与えられた文化的意味とその変容を明らかにした。アメリカでは南部の白人労働者階級の文化として辺境的地位にあるカントリー音楽が、導入期の日本では特権的な若い男性によって受容され、同音楽に歌われている苦難などのテーマが普遍的で私的な経験として解釈されるなど意味の再編成が行われた様相や、日本のカントリー音楽家による作品において同時代のアメリカのカントリー音楽で頻出するイメージや概念が流用される際に新たな意味を与えられたことなどを歴史的な背景とともに論じた。また、1970年代のアメリカのカントリー音楽を巡る批評では、アウトロー・カントリー音楽家および同時代に活躍した女性音楽家が保守的なジェンダー規範を投影し議論する対象として機能していたことを示した。同音楽が白人性や男性性と結びつけられ、世代やジェンダーのアイデンティティを構築することを助ける役割を果たしたことを示した。

この研究は学際的な視野からアメリカ文化を論じるものであり、特にこれまで十分な学術的な関心が払われてこなかった保守派の音楽と政治との関連性に焦点を当てたことと、カントリー音楽を1960年代以降の保守化という変容の相において捉え歴史的に位置づけていること、音楽を歴史を彩る付随物あるいは社会を映す鏡として二次的に扱うのではなく、積極的に文化形成を担う様相を示したこと、そして、日本での受容などトランスナショナルな視点を取り入れ国際的な学術貢献をしていることを特徴としている。さらに、本研究の扱ったアメリカ社会の変容は現在に直接影響しており、その様相を解明したことは現在のアメリカ社会の歴史的理解につながる実利的な意義がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Tachi, Mikiko.	4. 巻 -
2. 論文標題 Country Music and Presidential Politics in the Contemporary United States	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 17th Hawaii International Conference on Arts and Humanities	6. 最初と最後の頁 360-387
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tachi, Mikiko.	4. 巻 -
2. 論文標題 Cowboys, Rednecks, and Bluebloods: Domesticating Country Music in Japan	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Proceedings of the 14th Hawaii International Conference on Arts and Humanities	6. 最初と最後の頁 451-472
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tachi, Mikiko.	4. 巻 -
2. 論文標題 Country Music and Conservative Politics in the United States	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of the 18th Hawaii International Conference on Arts and Humanities	6. 最初と最後の頁 刊行予定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件/うち国際学会 9件）

1. 発表者名 Tachi, Mikiko.
2. 発表標題 Gender and Politics in American Country Music: The Reception of Country Musicians in the U.S. and Japan in the 1970s and 1980s
3. 学会等名 10th Annual Conference, Popular Culture Association of Australia and New Zealand（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tachi, Mikiko.
2. 発表標題 Build As We Sing: Trans-Pacific Interpretations of the Music of the War on Terror
3. 学会等名 American Studies Association Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tachi, Mikiko.
2. 発表標題 Country Music and Conservative Politics in the United States
3. 学会等名 18th Hawaii International Conference on Arts and Humanities (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tachi, Mikiko.
2. 発表標題 The Emerging Women: The Reception of American Female Country Singers in Japan
3. 学会等名 American Studies Association Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tachi, Mikiko.
2. 発表標題 Country Music and Presidential Politics in the Contemporary United States
3. 学会等名 17th Hawaii International Conference on Arts and Humanities (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tachi, Mikiko
2. 発表標題 American Country and Folk Music as Pedagogical Tools of Dissent in Japan in the 1950s and the 1960s
3. 学会等名 American Studies Association Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tachi, Mikiko
2. 発表標題 Borrowed Nostalgia: The Japanese Reception of American Home in Country Music
3. 学会等名 American Studies Association Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Tachi, Mikiko.
2. 発表標題 Translating Misery and Resistance: The Reception of Country Music in Post-WWII Japan
3. 学会等名 American Studies Association Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Tachi, Mikiko.
2. 発表標題 Cowboys, Rednecks, and Bluebloods: Domesticating Country Music in Japan
3. 学会等名 14th Hawaii International Conference on Arts and Humanities (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 アメリカ学会編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善	5. 総ページ数 960
3. 書名 アメリカ文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----